

『野馬臺詩』をめぐる説話譚

—『吉備大臣入唐絵巻』—

萩原 義雄

はじめに

『野馬臺詩』の研究は、多く説話の観点から着目され多くの先学研究書が世に流布されてきている。先行研究のなかでもとりわけ早い時期の注釈書としては、江戸期(寛政九年(一七九七)龍集丁巳孟春穀旦、文政五年(一八二二)壬午季夏再刻)に刊行された高井蘭山編『野馬臺詩國字抄』全一冊が知られている。架蔵本(東都書林板元、江戸橋四日市上總屋惣兵衛・同所上總屋利兵衛)を以て示すことにする。後版に、『野馬臺詩餘師』全一冊(弘化三丙午年(一八四六)夏六月刻成、東都書肆、本所表町・菊地虎松梓)がある。

野馬臺の文ハ梁の禪僧寶誌和尚作る所也。宝誌姓は朱子金城の人。事ハ高僧傳に出。昔時宝誌行道の日、化女忽然として來て語ること舊より相識れるが如し。一女去れば、一女來り如斯すること一千八人也。皆國の終始を云。和尚恠て千八人の女を以て字を作れば、則倭の字となる。仍て倭國の神なることを知る。彼女の言を認て二十二韻の詩を作、將來に貽す。日本の讖文也。吉備大臣、武帝の前には是を詠に日頃祈念する本邦和州長谷の觀音、蜘蛛と現し、絲を曳て讀しむ。梁の誌公ハ是觀音大士にして自ら倭國の讖文を

作たるも知るべからずと云云。

と記載している。五言十二韻百二十字の扶桑の讖文から成っている。吉備大臣については、日本から第四十五代聖武天皇の御宇に派遣された遣唐使安倍仲磨に次ぐ遣唐使として唐の國に派遣され、仲磨は帰国することが出来なかつたが、吉備真備は日本に再び戻ることが出来た人物である。その時真備は、この書を秘して伝えていない。故に『野馬臺詩』は遺つていても読む人がいなかった。五十代桓武天皇の御代小野篁に勅して読ませたが、小野篁にも解読できなかった『野馬臺詩』であった。そして竟に、長谷寺に参詣し、三十七日祈誓したところ、大士、また、應感の化身蜘蛛と現じて誌しなされた。是より本朝でこの詩を盛んに使われるようになったという。その故に、觀音の悲願は益々著しく、この『野馬臺詩』を称して、『日本の未来記』と云うのだという。因みに、中世の軍記物語『太平記』巻第六には、「正成、天王寺未來記披見ノ事」と云う章に、「當人王九十五代。天下一亂而主不安。此時東魚來呑四海。日沒西天三百七十餘箇日。西鳥來食東魚。其後海内歸一三年。如猴者掠天下三十餘年。大凶變歸一元。云云」が知られている。この四天王寺に伝来する聖德太子の未来記との連関性を今後考察することも面白かるう。

『野馬臺詩』の百二十文字のなかに、「流」三字、「百」二字、「終」二字、「中」二字、「後」二字、「天」二字、「国」二字、「水」二字、「孫」二字、「代」二字、「爲」二字と同字使用が多く、智永『千字文』のごとき、同字を重複して用いない意識からすれば將に拙き詩ということにもなるう。

また、『江談抄』卷二雜事、吉備入唐問事に、「然又鬼來云。今度有議事。爰高名智德行ニ密法ニ僧寶志令課テ。鬼物若靈人告トテ、令ニ結界ニテ、文ヲ作テ貴下ニ讀セント云事アリ。力モ不レ及ト云ニ。吉備術盡テ居之間。如レ案下レ樓。於ニ帝王前ニ令レ讀ニ其文」。吉備目暗テ、凡見ニ此書ニ字不見。向ニ本朝方。暫祈ニ申本朝佛神佛者長谷寺觀音也。目頗明ニシテ文字許見ニ無下可ニ讀連ニ様上ニ。蛛一俄落ニ來于文上天イヲヒキテツ、クルヲミテ讀了。仍帝王并作者毛彌大驚テ。如レ元令レ登樓。偏不レ與ニ食物ニ欲レ絶レ命。自今以後不レ可開樓ト云ヲ鬼物聞レ之告ニ吉備。々々尤悲事也。：江師云、此事我慥委ハ雖無見書。故孝親朝臣之從ニ先祖ニ語傳之由被レ語

也。又非無_レ其謂_一。大略粗書ニモ有_二所見_一之歟。……と記載する。

さらに、『江談抄』卷五・源中將師時亭文會篤昌事には、「寶志野馬臺讖、天命在_三公_一。百王流畢竭。猿犬稱_二英雄_一ト見タリ。王法衰微。憲章不_レ被_レ行之微也。豫答云、件讖何事起乎。被_レ命云、未_レ被_レ知歟如何。答云、不_レ知候。被_レ命云、件讖者是我朝衰相ヲ寄テ候也。依_レ之將來、號_二讖書_一也。仍爲_レ之日本國云_二野馬臺_一也。又渡_二本朝_一有_二由緒_一事也」とある。

一 詩の文字内容



一	腸	一	牛	龍	一	白	一	昌	一	孫	填	一	谷	一	終	一	始
一	鼠	一	眈	游	一	矢	一	微	一	子	田	一	孫	一	臣	一	定
一	黑	一	食	窘	一	水	一	中	一	動	魚	一	走	一	君	一	壤
一	代	一	人	急	一	寄	一	于	一	戈	鱸	一	生	一	周	一	天
一	雞	一	黃	城	一	胡	一	後	一	葛	翔	一	羽	一	枝	一	本
一	流	一	赤	土	一	空	一	東	一	百	世	一	祭	一	祖	一	宗
一	畢	一	與	茫	一	爲	一	海	一	國	代	一	成	一	興	一	初
一	竭	一	丘	茫	一	遂	一	姬	一	氏	天	一	終	一	治	一	功
一	猿	一	青	中	一	國	一	司	一	右	工	一	事	一	法	一	元
一	外	一	鐘	鼓	一	喧	一	爲	一	輔	翼	一	衡	一	主	一	建

丹 盡 後 在 三 王 英 稱 犬 野
一 一 一 一 一 一 一 一
水 流 天 命 公 百 雄 星 流 飛

〔首〕是より讀はじめ東海姫氏國と野引乃通りに茫 茫遂爲レ空と
〔尾〕是にて讀畢る也。國字附末にあれバ見合よむべし。

《本文解説文》

東海姫氏國 とうかいきしのくに
右司爲輔翼 いうしなるほよくと
初興治法事 はじめにおこしちほふのこを
本枝周天壤 ほんしあまわくてんじやうに
谷填田孫走 かくてんでんそんにほしり
葛後干戈動 かくのちかんくわうごき
白龍游失水 ぱくりゅうおよひでしつしみづを
黃雞代人食 くはうけいかわつてひとにしまし
百世代天工 もよかわるてんこうに
衡主建元功 かうしゆたつげえんこうを
終成祭祖宗 をはりになすまつごをそそうを
君臣定始終 くんしんさだむししうを
魚膾生羽翔 ぎよくおいしやうじてはねをかける
中微子孫昌 なかろびにしてせんさかんなり
窘急寄胡城 きんきふにしてよすこじやうに
黑鼠飡牛腸 こくそくらふぎうちやうを

丹水流盡後 たんすいながれつきてのち
百王流畢竭 ぱくわうのながれごとくつきて
星流飛野外 ほしなふれてとびやぐわいに
青丘與赤土 せいきうととせきど
天命在三公 てんめいあらんさんこうに
猿犬稱英雄 えんけんしやうすえいいうと
鐘鼓喧國中 しやうこかまひすしこくちうに
茫茫遂爲空 ぼうぼうとしてつひにならんくうと

《訓詁文》

東海、姫氏の國 百世、天工に代る。
右司、輔翼と爲り、衡主、元功を建つ。
初めに、治法の事を、興し、終には、祖宗を祭ることを成す。
本枝、天壤に周く、君臣、始終を定む。
谷填、田孫に走り、魚膾、羽を生じて翔る。
葛後、干戈動き、中ごろ微にして、子孫昌なり。
白龍、游いで水を失し、窘急にして胡城に寄す。
黃雞、人に代つて食し、黑鼠、牛腸を喰ふ。
丹水、流れ盡きて後、天命、三公に在らん。
百王の流れ、畢く竭きて、猿犬、英雄と稱す。
星流れて、野外に飛び、鐘鼓、國中に喧し。
青丘と赤土と、茫茫として、遂に空と爲らん。

現在のところ、未収載とする。今後作業続行予定「よろしく！誰か入力手伝ってください！」。

二 暗合コードを知る

長谷寺観音の大士化身し、蜘蛛に現じてその蜘蛛の絲筋にて紙面の文言を訓み進めたというこの『野馬臺詩』は、どのような構造をなしているのだろうか。まず、これを文字排列の秩序に順い、縦書き右の上隅みから訓読したらどうなのだろう。「始定壤天本宗初功元建終臣周枝祖興治法主……」。その試みは慥かにあつたものにも関わらず、どこにも記載されていない。端つから蜘蛛絲訓みを信じて示すのみであるから不思議である。このままでは深意が訓めないという事実に基づき、次に暗合が秘められていることに気づく。そして、改めて解読が想起されるのだが、詩の文言の上に蜘蛛の絲が差し示す圖に則り野線を引き、これを訓むことは、当の吉備真備大臣にもそれ相應の漢学素養としての識字能力がなければ読み上げることではできないだろう。であれば、この逸話は旨く成就出来ないからである。遣唐使吉備真備は、実在した人物であるが、この内容の説話は如何様にして誕生していったのであろうか。これを考えていくうえで、ボストン美術館所蔵『吉備大臣入唐絵巻』があり、何故、平安末期の後白河法皇の時代にこの絵巻が編纂されたかである。この時代の説話集『今昔物語集』などには、『江談抄』に依拠したと考えられる説話が巻二十四などにみられるといった指摘がなされているが、実際に同じ遣唐使であつた安倍仲麻呂については、第四十四の譚話「大系四二三四二頁」として収載されてながら、吉備大臣についての逸話は採録されずにあつたことは、説話の持つ特殊性と普遍性とを考える意味からも奇妙な関係にあるといえるのであるまいか。



三 『源氏物語』注釈書『河海抄』と『野馬臺詩』

紫式部の『源氏物語』巻十、玉鬘巻には、長谷寺観音の靈驗譚が見えている。この巻を注釈書『河海抄』がどのように見ているかを調べておこう。

はつせなむ日のもとにあらたなるしるしあらはし給ふともろこしにもきこえあなり

長谷寺観音十二面二丈六尺文武天皇御宇徳道上人造立之記也法道仙人是也縁起云長谷神河浦北豊山峯徳道聖人造

立十一面観音菩薩之利生道場也。神龜元年公家被建立堂一宇。同四年三月廿日供養 講師 行基

菩薩。(大唐)僖宗皇帝后馬頭夫人文宗孫女成太子娘形のみにくき事を歎き給けるに仙人のをしへによりて東に向て

日本国長谷寺観音に祈請し給けるに夢中に一人の貴僧紫雲に乗て東方より來て手をのへて瓶水を面に灑とみて忽に容兒端正になりにけり。因茲乾府三年丙申七月十八日侍女を引率して明州の津にいてむ

かひて十種の寶物をたてまつらると云云。又吉備大臣入唐時長谷寺観音住吉明神に祈請して野馬臺を

讀けるに靈瑞あるよし江談に見えたり。「角川書店刊、三八七頁」

とあつて、前半は『長谷寺縁起』収載説話を引用し、後半部に「野馬臺」の故事を大江匡房の談話を筆録した『江談抄』〔長治元年(一一〇四)〜四年(一一〇七)頃か〕。川口久雄著『平安朝の漢文学』〔日本歴史叢書・吉川弘文館刊〕第四「平安朝後期における学問の展開」のなかで、「匡房の学問は幅が広く多様性をもつが、その一つの特徴は民衆的説話的な興味が旺盛なことである。彼の談話を筆録した『江談抄』には、正当な古典にみることのできない奇妙な神怪なふくれあがった説話を大切に語つたりしているが、それらはあるいはこうした宋より輸入されたもの、無名の類書あたりにたね本を求められるかもしれない。『江談抄』には、ペルシア国語が採取さ

れているが、あるいは鎮西都督時代、宋人から聞いたものであろうか。白石がシドツチから外国事情を聞いたように、匡房も宋人から当年の世界事情を聞いて白河法皇に話題を提供したりしたかもしれない(二四四頁)と述べている)に記載されている旨を記載する。ここで、考えさせられることは、匡房の談話はかなり特殊な内容だったのかということである。この真備の逸話は、大陸中国と日本人との深い関わりを持った内容であるのにも拘わらず、日本の平安朝時代の作品中には全くと言ってよいくらい登場してこないのは何故なのだろうか。長谷寺観音の逸話であれば、長谷寺をテーマとして記載されるところの多くの作品中の片隅にでも表出してもよいはずなのに……、長谷寺引用の作品中にも一つも見えていないからである。そして突然、この大江匡房の母方の祖父である橘孝親が、先祖より語り伝えたという談話聞き書きであるところの『江談抄』から始まり出すのである。この『野馬臺詩』の成立をこの平安後期以前と認定するのには聊か無理な感じがしないわけではない。

四 室町時代の古辞書『下學集』所載の吉備大臣

室町時代の古辞書である『下學集』第六、人名門に、

吉備大臣 元正天皇遣唐使也。在唐時欲讀野馬臺文。々々義難曉。蜘蛛引絲而教之。即得

讀焉。蜘蛛即我朝和州泊瀬觀音冥助也。吉備大臣在唐詠倭歌(人名門47③)

《注記文書き下し》

元正天皇の遣唐使なり。在唐の時、野馬臺の文を讀んと欲す。文の義曉難し。蜘蛛絲を引きて之を教ゆ。即ち、讀むことを得たり。蜘蛛は、即ち我が朝の和州、泊瀬の觀音の冥助なり。吉備の大臣、唐に在りて倭歌を詠む。

※吉備真備(六九五〜七七五)は、本姓下道真吉備。養老元年(七一七)遣唐留学生、また、遣唐副使として二度にわたり入唐(足かけ十

八年間滞在)。天平七年(七三五)帰国。「唐礼」「大衍曆經」を将来する。『私教類聚』刪定律令」を著す。唐文化の輸入につとめ、その知識を政治に反映させていった。

※元正天皇は、奈良時代前期の女帝。草壁皇子の第一王女。母は元明天皇。名は氷高。在位は七一五年から七二四年。六八歳。

と、「吉備大臣」について「野馬臺」文について記録収載する。ここでは、『吉備真備大臣物語』や『吉備大臣入唐絵巻』(「野馬臺詩」の部分は残存せず)に見える『文選』解説譚と圍某勝負譚については全く触れていないことを知る。三つの伝説譚が真備の人物像を形成していたのが、(ここでは、「野馬臺詩」文だけが特出して、長谷寺観音の靈驗が示唆され、末尾注文句「吉備の大臣唐に在て倭歌を詠む」の一文は上記資料からは確認できない内容でもある。「倭歌」そのもの自体を載せていないことも問題であろう。当代の知識人は、真備作の「倭歌」をどう想定していたのであろうか。この古辞書を引用する古本『節用集』や『壺裏鈔』での取り扱い方法も留意しておきたい。広本(文明本)『節用集』には、

吉備大臣 元正天皇時遣唐使也。在唐之時欲讀野馬臺文。々々義難曉。蜘蛛引

糸而教之。即得讀焉。蜘蛛即我朝和州泊瀬觀音冥助也。吉備在唐詠倭歌焉(幾部・人名

門813⑥)



とあって、『下學集』の注記内容を概ね継承するものである。さらに、黒本本『節用集』の標記語「野馬臺」の注記文末尾には「又有野馬臺詩」諸公作之吉備大臣

臣讀之云云(夜部116①)と云う付加文記載が成されている。とすれば、『下學集』の編者東麓破衲は、同時代の遣唐留学生である阿倍仲麻呂と吉備真備を同一人化して史実の内容を誤認していなかったのか……。実際、仲麻呂には、『古今和歌集』(延喜五年(九〇五)成)巻第九・羈旅哥406番に、三笠山の歌が遺り伝えられている。

この歌を吉備が詠んだと認識しているとすれば、編者東麓破衲は、室町時代禪僧の一人として日本の和歌の道にさほど通じていないことが見えてこよう。これを以て、この室町時代の本邦連歌師等が韻学教養書として『下學集』を使用する上で、この中日人名集録は、如何なる情報提供であったのだろうか。「野馬臺詩」文の本文資料そのものは、本辞書中には全く未収載なのである。これらの注記内容に何ら疑問批評が見られないことも留意しておかねばなるまい。この『下學集』記載の注記内容がどのように受容されていたのかを今後考察することをここでお奨めしておきたい。

おわりに

この資料は、平安後期に絵巻として制作され、中世以降の人々に大きな関心事として伝えられはじめたことが重要な手懸かりであろう。前述した如く、紫式部『源氏物語』の古注釈書で玉鬘巻は、長谷寺観音靈驗譚を記載し、『長谷寺驗記』にみえる馬頭夫人譚と野馬臺詩伝承譚を記載する。その古注釈『河海抄』には、「野馬臺詩」の引用態度を見るに、「吉備大臣入唐時長谷寺観音住吉明神に祈請して野馬臺をよみけるに靈瑞あるよし江談に見えたり」と記載するのである。また、室町時代の古辞書である『下學集』第六、人名門に「吉備大臣 元正天皇 遣唐使也。在唐時欲讀^{ヨマ}野馬臺^ノ文^ヲ々々義難^シ曉^{サシ}。蜘蛛引^{クモ}レ絲^{イト}而教^シ之^ヲ。即^チ得^{タリ}レ讀^{コト}ヲ焉[。]。蜘蛛^ハ即^チ我^カ朝^ノ和州^ノ泊瀬^ノ觀音^ノ冥助^也也。吉備^ノ大臣^在唐^ノ詠^ニ倭歌^ヲニ「人名門47③」と「吉備大臣」について記録収載する。この時代の連歌師にとつて、この『下學集』記載の注記内容がどのように受容されていたのかを考察することも忘れてはならないことである。そして、江戸時代の受容性としては、『本朝一人一首』の記載へと発展し、江戸後期になると、高井蘭山編『野馬臺詩國字抄』といった注釈書が編まれていることも忘れてはならない。

この逸話が、近代日本の文化のなかで再び風化し、人々に関心が及ばぬ時代を経て、海外であるアメリカ合衆国ボストン美術館に流出したこの絵巻物が再び日本人の眼にとまったのである。この内容を事細かに観察し、考察するに良い機会が巡ってきている。中央公論社から出た複製である色彩の書物は、将にありがたい研究資料なのである。この絵巻は、巻頭と巻末を欠損し、元若狭小浜藩主として入封^しした酒井忠勝（一五八七—一六六二）に収納され、酒井家後裔忠克が襲蔵していたのを、大正十二年（一九二三）六月の入札売却、後の昭和七年（一九三二）に彼の地のボストン美術館の所有となった。当初は一卷だったものを昭和三十九年に東京に里帰りしたとき四巻に改装されている。

《参考資料》

○高井蘭山編『野馬臺詩國字抄』全一冊

○『本朝一人一首』〔新日本古典大系四二三頁〜四二四頁影印、二八七頁〜二九〇頁訓読にて翻刻〕に438「野馬臺詩」を収載。

○小峯和明著『野馬台詩』の謎——歴史叙述としての未来記——岩波書店

○塩出貴美子一九八六「吉備大臣入唐絵巻考—詞書と画面の関係—」『文化財学報』4参照。

○『吉備大臣入唐絵』〔新日本絵巻物全集6・角川書店刊〕

解説部の初めに『吉備大臣物語』〔大東急記念文庫蔵（第二紙の継ぎ目の文字に難有り）の写真版と、別本吉備大臣入唐繪斷簡（神光院蔵）、（個人蔵）の二葉を収載する。〕

○『吉備大臣入唐絵巻』〔日本の絵巻3・小松茂美編・解説、中央公論社一九八七年六月刊、大学図書館所蔵番号、4F大型721/33-1/3〕を参照。

○大江匡房『江談抄』〔一一〇四—〇七年成立〕巻第三・雑事の冒頭に収載する「吉備入唐間事」譚（類従本系『江談抄注解』武蔵野書院刊75頁〜86頁）を素とする。「矢代幸雄「吉備大臣入唐繪詞」美術研究二二號所収」。

『吉備大臣入唐絵詞断卷』(岡山県立博物館蔵)「アスアリトヲモフ心ニキヤウモハカラレテムナシクシラスルカナ」の文言を確認する。

『吉備大臣入唐絵卷』(きびのおとぎにつとうえまき)

〔詞書〕部分の翻刻)

〔第一段〕欠落

〔第二段〕

よなかばかりになるらむとおもふほどに、〔雨降〕あめふり、〔風吹〕かぜふきなどして、身乃けだちておまゆるに、〔皮亥〕いぬのかたより、〔鬼〕おに、〔我〕うかざひきたる。きび、〔吉備〕身をかくすふをつくりて、〔鬼〕おに、〔見〕みえずながら、〔吉備〕きび乃いはく、〔日〕いかなるも乃ぞ。〔我〕われはこれ日本國乃王のおほむつかひなり。わうじもろきことなし。〔鬼〕おになむぞうかがふや、〔云〕といふに、〔鬼〕おに、〔答〕こたへていはく、〔最〕もともうれしきことなり。われも日本國乃〔遣唐使〕けむたうしにて、〔渡〕わたれりしものなり。〔物語〕ものがたりせむとおもふ。といふに、〔吉備〕きび、〔答〕こたへていはく、〔達〕あはむとおもはざ、〔鬼〕おにのかたちをかへてきたるべしと云ふに、〔魁〕おに、〔扇〕かへりさりて、〔衣冠〕いくわむをしていできたり、〔吉備〕きびあひぬ。〔鬼〕をに、〔まづ〕いはく、〔我〕われはこれ日本乃〔遣唐使〕けむたうしなり。わがしそむ、〔阿部家〕あべのうちはべりや。このときかむとおもふに、〔食物〕いまにかなはぬなり。われは〔貴位〕きゐにて、〔来〕きたりてはべりたりしこ、〔樓〕こ乃ろうにのませられて、〔食物〕くひものをあたへざりしかば、〔絶〕う多しにて、〔死〕かゝるを二となりて、〔樓〕こ乃ろうにすみはべるなり。人をがいせむ心なけれども、〔我〕わがすがたをみるにたへずして、〔連〕あひたるなり。わがくにのことをとほむとするにも、〔答〕こたふることなし。けふさいはいこ、〔貴下〕こあひたてまつりたり。よろうところなり。わがしそむは官位はべりやといふ。大臣、〔詳〕くはしくありさまをかたるをききて、〔鬼〕おに、〔大〕おほきによろこびていはく、〔日〕こ乃をむには、〔鬼〕こ乃くにのこをミな、〔語〕かたりまうさむとおもふなり、〔云〕といふ。

大臣、よろこびて、〔喜〕もともたいせつなりといふに、〔夜明〕よあけなむとすれば、〔鬼〕おに、〔扇〕かへりぬ。

〔第三段〕

そのあしたこ、〔樓〕ろうをひらきて、〔唐人〕たうじん、〔食物〕くひも乃をもてきたるに、〔文〕大臣ことなくてあるをミて、〔唐〕たうじむ、〔笑〕いよ〔云〕あやしむ。また、〔使〕こ乃日本乃つかひ、〔才〕さい乃う人にすぎたり。ふみをよませて、〔誤〕そのあやまりをわらはむといふなり。このよしを、〔鬼〕こにきてつぐ。きび、〔文〕いかなるふみぞととふに、〔聞〕をに乃いはく、〔日〕こ乃くに、〔極〕きはめてよみにくきふみなり。文選といふなり。大臣乃いはく、〔沙汰〕そのふみつたへきて、〔聞〕かたりたまひてむやといふに、〔鬼〕おに、〔我〕われはかなはじ。貴下をあひぐして、〔沙汰〕かのさたのころへいたりて、〔聞〕きかせむとおもふなり。それらうを〔聞〕とぢたるは、〔い〕いかゞしていでたまはむするといふに、〔吉備〕きびのいはく、〔我〕われハ飛行じぎいの術をしれり、〔云〕といひて、〔樓〕ろうのひまよりともいで、〔文〕もむぜんかうずるていわうのミやにいたりぬ。二十人のかせ、〔博士〕よもすがらよむをきこてかへりぬ。〔鬼〕をにおにのいはく、〔求〕きこえたりや。大臣乃いはく、〔古〕ふるきこよみ十巻たづねて、〔与〕あたへてむやといふに、〔鬼〕おに、〔求〕すなはちもとめてあたへつ。

〔第四段〕

〔吉備〕きび、〔得〕これをえて、〔文選〕もむぜんの上ちく十巻がはし、〔博士〕を三四枚づつかきて、〔樓〕ろう乃うちにやりちらしつ。そのうち一兩日をへて、〔文選〕もんぜむ三十巻をぐして、〔博士〕はかせ一人、〔書〕勅使としてらうにきたりて、〔心〕心ミむとするに、〔文選〕もんぜむのはし、〔散〕をちらしおきたるをミて、〔唐〕たうじむ、〔怪〕あやしみていはく、〔文〕こ乃ふみはいづれの所ニはべりけるぞやとへば、〔文〕このふみは、〔我〕わが日本國にもむぜんといひて、〔皆〕人のミなくちづけたるふみなりといふ。たうじむ、〔驚〕おどろきて、〔持〕もてかへるときに、〔吉備〕きびのいはく、〔我〕わがもちたる本にみあはせんといひて、〔文選〕もんぜむをはかりとりつ。

〔第五段〕

〔唐人〕きて、〔打〕またたうじむ、〔義〕ぎしていはく、〔日〕さえはありとも、〔才〕げいはあらじ。こをうたせて、〔心〕心ミむといひて、〔石〕しろきいしをば日本乃人にうたせて、〔打〕くろきいしをわれらうちて、〔着〕こ乃かたちにつけて、〔殺〕日本のつかひをころさむとあひ

「議」ぎす。おに、「鬼」またこのよしを「由」つぐ。「告」大臣、これを「聞」き、て、「碁」ごとはいかやうなるものぞ、「とた」つぬれば、「二」二百六十「一」もくあるもの、「ひ」じりめ丸は「る」なるといふ。大臣、よもすがら、「て」む上乃く「み」れにむかひて、「あ」むじえたり。

〔第六段〕

「次」つぎ乃日、「あ」むの「盗」ごとく、「飲」この上手をつかはして、「遣」うたするに、「勝」勝負なし。そのときに、「吉備」きび、「唐」たう、「乃」乃かた乃「黒」くろいしを「盗」ひとつぬすみて乃「飲」つ。かち「勝」まけをあらそふをり、「たう」たうじむ、「ま」まけぬ。「あ」あやしき事なりとて、「い」いしをかぞふるに「た」たらず。よりにて「う」うらなふに、「ぬ」ぬすみての「め」めるなり、「と」とらなふ。きび、「お」おほき「あ」あらがふに、「さ」さらば、「か」かりろぐ丸をぶくさせて、「い」いたさむとするに、「き」きび、「あ」あむしと「め」めて、「い」いださず。ついに「か」かちぬ。

〔第七段〕 欠落

◎『吉備大臣物語』(大東急記念文庫藏、鎌倉初期写本断簡。汲古書院二〇〇七年刊)を翻刻する。 ※句読点

は、翻刻の際、私が便宜的に付載したものである。

吉備之大臣唐土渡ワタリテアリシニ諸モロク乃ミチノ乃唐人トモハチテ相アヒ義ソノ云イハク我等ラ不安ヤカラヌ一事ナリ。ヲトルヘカラス。マツフツウノコト日本國ツカヒ、タウライロウニホセテスヘシム。此コノ事コトクワシクカカスヘカラス。又件ノ楼ニ宿スル人ヲ、クハ難存シ。シカレハ先、樓ニ上セテコ、ロミルヘシ。偏ヒトエニコサハフケウナリ。カヘサハ又ヨシナシナント議、樓ニスエシムル間、夜深向ニ及、テ風力吹、雨アメフリテ鬼ウカ、ヒ来キタル。吉備身ミラ、隠、符ツクリテ鬼ニミエ爪。吉備云クナニモノソ。我ハ是、コレ日本國之王、乃使者ナリ。皇子モワヒントナシ鬼ナソウカ、ウト云イフニ鬼之云イハク尤モトモト悦哉ウレシキ。喜哉、ヨロコビ。我ワレモ又日本國遣唐ノ使者ツカヒ也。イヒカタラムトオモフト云イフニ、吉備云イハク早、還カヘリテ鬼、形カタチヲ止トメテ可来キタルヘシト云イフニ、随シタヒテ鬼、還テ衣冠正タ、シウシテ出来イテキタル。吉備アヒ又鬼先マツ云イハク我ワレ是、コレ遣唐使也。我ワカシシ孫安隱ニ氏ウチハ侍哉。此コノ事コト聞キカムト思ワモフニ、于今イニカナワヌナリ。我ハ大臣来、侍ハシリシニコノ樓ニホセテラレテ食物アタエスシテニ死シタルナリ。其後鬼トナリテ此樓ニ

登ノホル人ニ害心ナケレトモシセンニ害ウルナリ。亦如此カクノコトク相向本朝也。事問トハムト想ラモフニ、不答シテ死シヌルナリ。貴下アヒ申マラスヨロコフ處也。我ワカシシ孫官位侍、ハシレ哉。吉備、答ヘテ云イハク其人々官位子孫之様ヤウヲ七八人計ハカリヲカタルヲ聞テ大ラ、感カカムテ云イハク此事聞キタ極メテウレシ。此ノ恩ラシニ、此國乃事マナコトノク語カタリ申サムトモフナリ。吉備ヲホキニ感、カカムテト云イハク尤大切也ト云フケテ鬼カヘリヌ。其ソノ朝アシタニ樓開セラヒテ食物モテ来キタルニ、イノチ存シテ不死ナシ。唐人コレヲミテ弥イヨクアヤシム又鬼来キタリテ云イハク此國ニ議スル事アリ。日本國之使ツカヒ、財能奇異也。文フミヲ讀ヨマセテアヤラムヲ咲ワス。吉備カ云、何イカナル書ソヤ。文選トナツク、一部三十卷諸家之神妙物ヲ集、アツメタル也。其時トキ吉備云ク、件クタンノ文フミ聞キテ、傳ツタエテ説トイテムヤ否イナヤ。鬼ヲ我ワレカナハシ貴下ヲ隨身シテ彼、沙汰處ニイタリテ令聞キカシメムトオモフニ樓閉トチテアレハ、イカニシテカ、イテラルヘキヤ。吉備云イハク我ワレヒキヤウシシ、飛行自在之術。樓乃ヒマヨリ共トモニイテ、文選カウスル帝王乃宮、イタリテ、ヨモスカラ卅人之ハカセ、カウセシム。聞キテ共トモニ還カヘリヌ。鬼カ云イハクキ、エタリヤ。吉備カ云、キ、ツ。フルキコエ三十余卷モトメテアタエラレヨイフニ、鬼フルキコエ三十卷モチテ来キタル。吉備コレヲエテ、文選之上帙十卷之ハシノ、ヲ三四枚ハカリヲカキテモチタルニ、一両日ヲヘテ文選ヲクシテ樓ニウチニヲクリタルニ、ハカセ一人勅使トテ、コ、ロミムトナスルニ、文選ハシラ樓之内ウチニチラシヲキタリ。唐人コレヲミテ、各々ヲノクアヤシミテ云イハク、此ヲ文マタヤ侍トイフニ、多々ナリト云テアタエシム。唐人ヲトロキテ、コノヨシヲ帝王マウス。コノ書ハ本朝ニアルカト、ハルニ吉備カ云イハク出来キタリトシヲヘタリ。人皆口ニ誦スルナリト申ス。唐人ノ云ク、此直ニアルナリトイフニ、吉備ミアハセムトイヒテコヒウケテ卅卷カキトリテワタセルナリ。サテマタ樓トチテ去サリヌ。唐人議云ク、オハアリトモ、ケイハアラシ。コヲモチテ、コ、ロミムトイヒテ、白石ヲ日本ニ擬シ、黒石ヲ唐ニ擬シテ、此ヲセウフヲモチテ日本國ヲコゴシカイセムスルヤウヲ計事。鬼又吉備ニ告ツク。コレヲキ、テ、此様ヲ委クワシク問トイ聞キ、テ、樓ノクミイレ三百六十目指、聖目一夜案シテ唐之コノ上手トウタシム。千ヲウチテ、十千マケナキ時トキ、吉備ヒソカニ唐ノカタノ、クロ石イヒトツヲヌスミテ、クチニノム。唐マケヌ。唐人等ヲカ云イハク、ケウノ事ナリ。コノ上手ハカチマケナシ。アヤシキ事也ト云ヒテ、石イシヲカソフルニタラス。仍ホクセイニオホセテウラナワシムルニ、ヌスミテノメルナリトウラナヒツ。腹中ニアリ。捨薬服セシメヨトテ、カリロク丸ヲ

クセシム。ト、ムルコヲ、モチテ、コレヲ捨シヤセス。ツイニ勝カチ畢ヲリス。又仍唐人オホキニイカリテ食ヲアタエス。鬼ヨコトニ食ヲアタエテ、数月ニヲヨヒヌ。又鬼来テ云、今度議スルカアリ。我チカラヲヨハヌコトナリ。高名ノ有智徳行密法之僧ニ寶悉也トオホセテ、境界セシメテ、文ヲツクリテ貴下ニヨマセムトイフコトアリ。チカラヲヨハヌトイフニ、吉備スチナクシテ井タルアイタ、如案^{アンノコトク}樓ヲフロシテ、帝王ノマヘシテヨマシム。吉備メクレテ、凡ヲヨミエス。本朝ニムカヒテシハラク本朝ノ佛神ニウタヘマウス。神住吉ノ明神、佛ハ長谷寺ノ觀音、目メ少スヨシ明^{アキラカ}テ文字ハカリミユルニヨムヘキ様^{ヤウ}ナキニクモノヒトツ、ニハカニヲチキタリテ、フムテ、奈比^{ナヒ}キテツ、クレミテコレヲヨム。ミカト并ナラヒニ作者^{イコク}弥々ヲ、キニヲトロキテ、モトノコトク樓^ニホセテ、偏^ヒニ食^シセサレトモ存命ス。シカシタ、樓^ヲ閑トチテ自今已後ヒラカシト云フ間^{アイタ}、鬼コレヲキ、テ、吉備ニツク。吉備カ云ク尤トモカナシキコトナリ。若モシ此^{コト}ヲ土^ニ三百年ヘタル雙六^{スクロク}筒サエシ侍^{ハシ}ナムヤ。鬼ノ云、アリトイヒテ、ナツメノトウ、カツラハン、サイフハンノ上^{ウヘ}ニヲキテ、トウヲ、ヲウニ唐土ノ日月、符^フウセラレテ、一二三日ハカリ不現^{ケン}セス。唐土オホキニヲトロク。オメキサケフコトヒマナシ。コレヲウラナワシムルニ、術道ノモノ、フウシタルナリ。方カタラ指^{サス}ニ吉備井タル樓^ニアタリス。吉備ニ問^トフニ、吉備答^{コタ}テ云イハク我^{ワレ}不知^{シラス}。若モシワレ一日^ニ祈念^{キネム}セシ。日本國^乃乃^{フツ}シカラ威應アルカ。ワレヲカヘサレハサタメテ現^ケンセムカトイフニ、カヘスヘキナリ。ハヤクヒラクヘシトイフニトウヲトリシカハ、日現^シ月現^ス。仍テカエサレシナリ。我朝ノ高名、タ、吉備ノ大臣^ニアリ。文選・圍碁・野馬臺、此大臣ノトクナリ。

※1、「フケウ」は『江談抄』には「不忠ナリ」とするところ、カタカナ「チ」と「ケ」は字形相似の文字故、書写違えた可能性がある。「フケウ」の文字であれば「不興」の意歟。

※2、「鬼」は、日本から唐に留学した阿倍仲麻呂の靈であり、真備の唐國での難を幫助する役割を本譚では担っているが、仲麻呂の実名は本書では「我子孫安隱^{アンイン}二氏侍哉^{ニシツカヤ}」として語られていない。だが、絵巻物の詞書には、「わかしそむあへのうちはへりや（我が子孫安倍氏侍りや）」と記載する。また、『江談抄』も「我子孫安陪氏侍ヤ」と記載していることから、阿倍仲麻呂を対峙してこの説話が編纂されていたことが確認できよう。因みに、室町時代の古辞書『下學集』には、「吉備大臣」と「輕大臣」を併記して、ここで真備を助ける仲麻呂の鬼靈と輕大臣譚の燈臺鬼は、異国土邦人譚として邦人が描いた或種の大陸人恐怖性を常に秘めて傳法し続けているのであるまいか。『下學集』編者東麓破納の収載方針には中日「鬼」交流譚をどう位置づけるかが今後の課題である。

※3、『文選』は、梁武帝長子蕭統（昭明太子）等撰、三十巻で六世紀前半に成立。今、唐李善注の六十巻が傳存する。周から梁に至る約千年間の美文八百編を文体別（賦・詩）・時代別に編集した中国現存最古の撰集の書である。本邦には、奈良時代に渡来し、古寫本断簡（李善注。他に、九條家舊藏書陵部藏『文選』三十巻の一部など）が現存する。『日本国見在書目録』に「文選卅^{昭明太子撰} 文選六十卷^{李善注}、文選鈔六十九^{公孫龍撰}、…と記録され、歴代親王の七、八歳頃の讀書始の教科書となっていた。〔神田喜一郎『東洋學文獻叢説』「文選のはなし」〕

※4、「圍碁」は、遣唐使時代に日本に輸入された遊戯で、名手として僧辨正（大寶二年（七〇二）に入唐）、奕碁の名手伴宿祿少勝雄（延暦二十三年（八〇四）に入唐）している。唐の蘇鶚著『杜陽雜編』には、大中年間（八四七―八五九）に入唐した日本国皇子と中国随一の名手顧師言と手合わせし、この名手の「鎮神頭」の手により皇子が負ける話を記載している。この吉備大臣の逆譚となっている。本邦古辞書、十巻本『伊呂波字類抄』に、「碁^ノ亦^亦碁^碁碁^碁先^先造^造之^之。圍碁。碁局。碁。枰。碁子。各白黒百七十一」〔卷七139②〕とし、晉の張華著『博物誌』の「堯ハ圍碁ヲ造リ、子ノ丹朱ニ教ウ。舜子ノ商均愚ナルノ故ニ圍碁ヲ作りテ之ヲ教ウ。ソノ法智ニアラザレバ能ハザルナリ」の文言を以てその起源としている。

※5、「訶梨勒丸、呵梨勒丸」は、シクンシ科の落葉喬木の名。中国・インドシナ半島・マレー半島に産し、木の高さは三十メートルに達し、白き花を咲かせ、果実は褐色卵円形で縦に五稜乃至六稜の襞があり、これを薬とする。『金光明最勝王經』除病品に、「訶梨勒は、六味を具へ能く一切の病を除き薬中の王なり」と記載する。本邦には鑑真和尚が伝えたとする。藤原明衡編『新猿樂記』一卷に舶来品五十餘種の一つとして「可梨勒」を記載する。源爲憲『三寶繪詞』三卷、永觀二年成）にも「訶梨勒丸」の名が見える。実際に、藤原実資の『小右記』永延元年六月九日、十一日、十四日の記録に服用薬として記載が見えている。※6、「野馬臺詩」は、字謎詩の題名にて、五言二十四句の難訓詩である。『古事類苑』姓名部所引、古鈔本『下學集』卷上附後野馬臺詩海蔵祖註に所載。

大東急記念文庫には久原文庫旧蔵「南都諸大寺縁起」二卷(巻頭部佚)の書名不明な書がある。他類書からこの書が『建久御巡禮記』(一一九二年)であることが判明している。この書の巻末第二十七紙から第三十紙に、本物語が書写されているのである。

この内容が『江談抄』所収の文面と概ね合致し、上記参考資料に掲げた角川書店刊行の『日本絵巻物全集』末尾に挙げた三本対校を以て見るとき、平安時代末期頃にはこの「吉備大臣入唐」譚が愛読されていたことを知るのである。

※7、『聖徳太子日本國未來記』一冊〔青森弘前市立図書館蔵、請求番号W一八〇〇九、江戸期慶安元年初冬〕の写本があり、「太子厩戸奉勘之」として「右此書出ツ于攝州天王寺寶庫」^{ヨリ}とある。

※8、阿倍仲麻呂は、靈龜三年(七一七)三月、第八次遣唐使の留学生として入唐(二十歳)。唐の太学に学び、科挙に合格、唐朝の諸官を歴任した。同行した真備・玄昉らは天平六年末、帰国の途につくが、仲麻呂は帰朝を許されず、その後も唐に留まった。天平勝宝五年(七五三)、遣唐大使藤原清河らと延光寺で鑑真に面会して渡日を依頼。その際自らも帰国を願って許されたが、日本へ向かった船は途中暴風に遭って難破、安南(ベトナム)に漂着し、再び唐に戻ることを余儀なくされた。のち、玄宗などに仕えて従三品の高位にまでのぼる。李白・王維ら文人と交流し、その詩はのち清乾隆帝勅撰の『全唐詩』にも収められている。宝龜元年(七七〇)、在唐五十四年、七十三歳にして唐の都長安に骨を埋めた。和歌は『古今和歌集』巻第九・羈旅哥406番の「もろこしにて月を見てよみける」一首として、

あまの原ふりさけ見ればかすがなるみかさの山にいでし月かも

が伝わるのみである。「この歌は、昔、仲麻呂を、もろこしに物習はしに遣はしたりけるに、あまたの年を経て帰りまうで来ざりけるを、この国よりまた使まかり至りけるにたぐひて、まうで来なむとて出で立ちけるに、明州といふ所の海辺にて、かの国の人、うまのはなむけしけり。夜になりて、月のいとおもしろくさし出でたりけるを見て、よめるとなむ、語りつたふる」とあり、頭注に「金玉、深窓、万葉、アマハラフリサケミレヨウフケニケルヨシエカシヒトリヌルヨハアケハアケヌトモ」と記載する。

【通釈】大空をはるかに仰ぎ見れば、月が出ている。今や微かな記憶になつてしまった春日の三笠山——その山から昇るのを眺めた月と、同じ月なのだなあ。

【語釈】

◇あまの原 広々とした大空。空を平原になぞらえて言う。『土左日記』ではこの句「青海原」とする。◇ふりさけ見れば 遙かに仰ぎ見れば。「ふり」は振り仰ぐ。「さけ」は遠く離す、遠い距離を置く。◇かすがなる 春日にある。「微かなる」と掛詞。

「はや」かすかなる『記憶しか残っていない故郷の山と、確実な記憶としての月の姿とを対比した表現が際だっている』(小松英雄『やまとうた 古今和歌集の言語ゲーム』。春日は、今の奈良県奈良市東部、春日大社とその周辺の地。

◇みかさの山 春日大社背後の山。山容が天皇に差し掛ける衣笠(絹張りの傘)に似ていることから、この名が付けられたという。

◇いでし月かも 「し」はいわゆる過去回想の助動詞。作者が月を見ているのは唐においてであるが、その月によって、昔奈良で見た月を回想している。

【参考歌】間人宿祢大浦「万葉集」

敬十二首
け中折句奇
二首

古今和奇集卷第九 蕪椽

モロコハニテ月ノミチヨミケル
女信ナカテ

金玉 海忘
万葉集
ヨリキミハ
ヨソフケニ
コシヨハシ
リヌルハヤ
ハヤトモ

アテノウツリサチニシハカスカナルミカ
サノヤニタチニハカセ
コノ奇ハカカシヤカテウツシモ
ノオウハニニカカシタリケルニヤ
ノトシツツテエカハリニウチノサリ
ケルシノコノウニヨリニタカヒニカリ
ケルニタクヒチニウチキナトテ
イテノタチケルニメウハトイフトヨ
ノウミニミチノカノウニノ人ニノリケル

仲磨朝臣也
中務大南五位
二年八月廿二日
馬遣唐使生唐
胡賜姓胡氏名衡
字雖然多不記
大唐光銀大夫散
騎常侍兼海部
中並比海部武南
國且贈滋明大郡
督靈龜二十入
唐羊十金

天の原ふりさけ見れば白真弓張りて懸けたり夜路はよけむ

作者不詳「万葉集」旋頭歌

春日なる三笠の山に月も出でぬかも佐紀山に咲ける桜の花の見ゆべく

《宮内庁書陵部藏》古今和歌集書込み

仲磨朝臣公卿也 中務大南正五位

上船守子靈龜 二年八月廿二日

馬遣唐使孝生唐朝

賜姓朝氏名衡 字雖然多不記

從八位上安下 大唐光銀大夫散 騎常侍兼比海部我開

國且贈潞洲大郡 督靈龜二ヶ入 唐羊十金

寶十二年

使藤原行清

船得婦遇風難

漂廻唐國

季注之銀

大夫安下明衡是也

ナシケリヨルニテリチ月ノイトオ
モシロノサシイチナタリケルシニ
テヨメルトナムカタリハタフル
オキノクニナカサシケル時ニフオニ
ノリチイチケルトテノ京ナル人ノモ
トニカバシケル

寶十二年
使藤原行清
船得婦遇風難
漂廻唐國
季注之銀
大夫安下明衡是也

六 天寶十二年与我 使藤原行

清同 船得婦遇風難 漂廻唐國

馬郡 盜斂云々年七十 □不能

季注之銀 大夫安下明衡是也。